

親子関係の心理学的研究

中川大倫* 樋口直子**

1 問 題

親子関係は、子どもの性格形成において、どのような役割を果すのであろうか。この分野の研究は、児童心理学、社会心理学、人格心理学、文化人類学、統計学などの進歩とともに、最近、とくに関心をもたれるようになった。このことは、性格の形成が、素質、体質その他生得的な条件の単なる展開ではなく、生育過程において体験されるもろもろの条件により、大きく左右されるものと、一般に考えられるようになったのであるから、至極、当然なことである。とりわけ、乳幼児は、その生活時間の大部分を家庭において過すので、その性格形成が、家庭内の人間関係、愛情関係、物的条件などによってつよく影響されるであろうことは、想像にかたくない。

親の子どもに対する態度、しつけをとらえようとする試みは、通常、質問紙法、面接法によって行われている。しかし、その質問事項は、研究者によってかなり異なっているため、それらによってとらえられる特性もまたかなりまちまちである。Symonds, P. M. (1939) が受容—拒否、支配—服従の二要因をあげ、直交座標で表示したことはよく知られている。その他、Radke, M. J. (1946), Baldwin, A. L. (1948), Shaeffer E. S. ら (1957), 品川ら (1958) は、それぞれ、独自の類型をあげている。児玉ら (1962) は、単なる類型化だけではなく、養育態度の多角的な組合せを問題にしている。もちろん、このような類型化を行う場合、その基礎になるものは親の養育態度である。研究者が、これをとりあげ、一定の原則によって類型化を行うわけであるが、そのときの原則には、研究者自身がいだいている仮設的な枠組が影響を及ぼす場合が多い。ここに、研究者の恣意が入りこむ余地があり、同一の養育態度をとらえようとしても、研究者によって異なってくることもおこりうるのである。かくて、親の養育態度を調査するための項目や養育態度の概念の混乱をさけようとして因子分析的な研究が行われるようになってきた。Roff, M. (1945), 中西 (1959), 矢吹 (1959), 竹内ら (1960), 矢吹ら (1960), Mason, D. R. ら (1960) の研究は、この種のものである。

親の態度、しつけと子どもの性格の関係を明らかにしようとして試みられた研究の数はきわめて多い。まず、乳幼児を主要対象としたものをあげるならば、牛島 (1952), 中西ら (1953・1956・1957), 牛島ら (1953), Sears, R. R. (1953), 石黒ら (1954), 津守ら (1958・1960), 山下ら (1958), 森ら (1959), 小島 (1959), 依田 (1960) らのものがある。とくに、都会と炭鉱地帯の幼児の保育を比較したものに玉井 (1954), 山間地の育児法をとりあげたものに星野ら (1959) の研究がある。

主として児童以上を対象としたものでは、前出の Symonds, P. M. (1939), Radke, M.

* 信州大学教授

** 松本 白百合幼稚園教諭

J. (1946), 平沢⁽⁶⁾ (1951), 中西ら⁽¹¹⁾ (1954), 赤塚⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾ (1956・1957), 島袋ら⁽²¹⁾ (1958), 品川ら⁽²²⁾ (1958), 山下ら⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾ (1961), Serot Naomi, M. ら⁽³⁸⁾ (1961), 児玉ら⁽³⁷⁾ (1961), 山田⁽³⁸⁾ (1961) らの研究がある。とくに、非行少年を対象としたものでは、Glueck, S. ら⁽⁸⁾ (1950) のすぐれた研究があり、わが国では、中西ら⁽³¹⁾ (1960) の研究がこの問題を取りあげている。

以上の諸研究は、いずれも、親の養育態度と子どもの行動のとらえ方、ならびに、それぞれの評価の仕方において、はなはだしく異なっているので、一様に分類することはむづかしい。

われわれがここで問題とするのはつぎのような点である。

- 1 まず、親子関係を吟味する場合に、子どもの行動を評価するのは誰が適当か、ということである。従来の諸研究では、a 親が評価する b 研究者が親に面接して評価する c 幼稚園、保育園、学校の教師や保母が評価する d 研究者自身が観察評価する e 被調査者の友人が評価する などの方法が用いられている。そして、とくに、cの方法によった場合に、親の養育態度と子どもの行動傾向の間に、特別な関係が認められないという結果が報告されている。本研究では、親の評価が適当か、教師の評価が適当か、幼稚園児を対象として、この点を明確にしてみようと思う。
- 2 親の養育態度の特定な型と子どもの行動傾向の間には、有意な関係がみられるであろうか。これまで、しばしばとりあげられてきた問題であるが、子どもの行動評価者を決定した上で、吟味したいと思う。
- 3 親の養育態度の類型については、すでに述べたような疑問が見出されるので、明確な概念化のためには、なお多くの因子分析的研究をまたねばならない。そこで今回は、既に発表されている分類を参考にして使用し、そのほか、比較的確実な家庭の側の要因として、兄弟数、出生順位、住居の広さ、同居者の有無、家の宗教、母の信仰、宗教的行事、授乳事情、離乳開始時期、終了時期などをあげ、これらの要因と子どもの行動傾向との関係を吟味してみたいと思う。

II 親の評価と教師の評価

1 目的

同一の幼児の行動傾向につき、親の評価と教師の評価を比較吟味しようとする。

2 調査対象

四施設（松本 2，諏訪 1，甲府 1）の幼児中、年長児（昭和35年度就学児）126名。その性、年齢は第1表参照。

第1表 調査対象

年齢 性	5	6	計
男	28	41	69
女	29	28	57
計	57	69	126

3 調査手続

幼児の行動を評価するために別表のような「行動評価の尺度」を使用する。この尺度は、幼児の行動中、問題と思われるような傾向を経験的に集めたもので、必ずしも、問題行動すべてを網羅しているものではない。まず、この尺度を用い、同一幼児の行動傾向につき、父兄と教師とに、それぞれ別個に評価を依頼する。評価の結果は三段階に換算し、好ましい方を1点、好

ましくないほど高点とする。教師の評価と父兄の評価との関係の吟味は、評価点の総和を用い、相関関係の分析によった。調査実施は昭和34年秋。

幼児の行動評価の尺度

1. 友達とあまり遊びませんか。	ほとんど遊ばない	仲のよい子とだけ遊ぶ	誰でも遊ぶ
2. お山の大将になりたがりませんか。	大変なりたがる	普通	ほとんどなりたがらない
3. よく無理をいいますか。	よく無理をいう	普通	ほとんどいわない
4. よくすねますか。	よくすねる	普通	ほとんどすねない
5. 親の注意をひくために、わざといたずらをしますか。	よくいたずらする	普通	ほとんどしない
6. 弟妹に嫉妬しますか。	よく嫉妬する	普通	ほとんど嫉妬しない
7. 弟妹に意地悪しますか。	よくいじわるする	普通	ほとんどいじわるしない
8. 親を独占しようとしていますか。	独占しようとする	普通	独占しようとするしない
9. 少し親切にしてくれる人に、非常になつきますか。	すぐなつく	普通	なつかない
10. いつも、いらいらしていますか。	いらいらしている	普通	いらいらしていない
11. 指をしゃぶるとか、服の端を口に入れる等の困ったくせがありますか。	多くある	一つ位	ない
12. よくかんしゃくを起しますか。	よく起す	時々起す	起さない
13. 恥しがりで、人前で物がいえませんか	いえない	普通	よくおしやべりする
14. いつでも疲れているようですか。	疲れている	普通	疲れていない
15. おちつきがないですか。	おちつきがない	普通	おちつきしている
16. 我ままな自分本位な性質ですか。	自分本位	普通	わがままな処はない
17. あなたはその子をもてあましていますか	ほとほともてあましている	時々もてあます	少しも困らない
18. おねしよをしますか。	よくする	たまにする	ほとんどしない

4 結果

親の評価と教師の評価との関係は、相関係数で +0.13。ほとんど関係があるとはいえない。親の評価は大部分母親であった。

5 考察

親の評価と教師の評価との間において、統計的に直接的な関係が認められなかったが、このような事実を裏づける根拠として、つぎのような点が考えられる。

a 観察者の主観による相違 この種の行動評価においては、観察者の主観による変容を無視することができない。しかし、両者とも観察の期間は相当に長いものである。教師の場合でも、最長2年半、最短7カ月、幼児に接し、その行動からうけた印象が評価の内容になっている。1～2回の観察によるのではなく、かなり長期間の観察の結果であるから、ある程度、恒常的な傾向をとらえたものと考えることができる。

b 評価の場面の相違 たとえば、調査項目の5, 6, 7, 8は教師にとって評価の困難な場面である。この点はなるほど、有力な理由とみなされる。しかし、つぎの点を考慮すると、この問題は、有力な理由とはなりえなくなる。

c 環境の違いによる幼児の行動の現われ方の差 家庭においてみられる幼児の行動と幼稚園においてみられる幼児の行動との間には違いがあるということである。Lewinは人の行動と発達を個体的要因と環境的要因との函数として示したが、幼児の環境が家庭から幼稚園に変れば、その幼児の行動傾向に相違がみられる事実は、十分起りうることである。

d 幼児の行動の発達分化の度合 cの理由に発達分化の点をあわせ考えると、一層容易に、低い相関係数の理由を理解できるかもしれない。そこで今回調査の対象になった年長児と同じ施設の年少児124名(昭和36年度就学児)の行動の評価を全く同様の方法で実施してみた。その結果によると、親の評価と教師の評価との間の相関係数は+0.58で、かなりの相関関係を認めることができた。もし、理由bのように、観察場面の相違をとりあげるならば、年少児の場合にも、やはり、その相関係数は低いはずである。しかし、実際に得られた値は+0.58であつたから、前述のような観察場面の相違は、低い相関係数を裏づける要因としては薄弱である。むしろ、環境の相違による幼児の行動の相違とみるのが至当であろう。しかも、幼児の行動は、未分化な状態から、漸次、分化し、複雑化してゆく過程を示すものである。したがって、年少児の場合に見出された比較的高い相関係数は、年少児が親にも教師にも比較的変わりなく反応することを意味し、これに対して、年長児のきわめて低い相関係数は、親に対する反応と教師に対する反応とが、必ずしも一致しない複雑な年長児の行動を裏がきするものとみなすことができよう。

Ⅲ 幼児の行動傾向と親の養育態度

1 目的

幼児の行動特性を評価するにあたり、親の評価と教師の評価との間にかなりずれのあることが前述の吟味で明らかになった。つぎに親の養育態度との関係を吟味するために、いずれの側の評価が有効であるかを検討し、親の養育態度と子どもの行動傾向との関係にさぐりを入れようと思う。

2 調査対象

前述の場合と同様である。年長児を用いる。

3 調査手続

前述のような「幼児の行動評価の尺度」による調査が終了してから、約1カ月後、「親の養育態度調査用紙」を同じ父兄に配布し、記入を依頼する。親の養育態度の調査項目は、田研式親子関係診断テスト⁽²²⁾両親用第一部の各養育態度類型の質問事項を、それぞれ、4項目に無作意的に縮小したもので、奇数項偶数項の相関は、+0.69、田研式との相関は+0.57のも

のである。養育態度の数量化は、行動評価の場合と同様である。親の養育態度と子どもの行動傾向との関係を知るためにつきのような二つの方法をとった。

a 子どもの行動につき行われた親の評価と教師の評価のそれぞれと、親の養育態度との間の相関関係を求める。

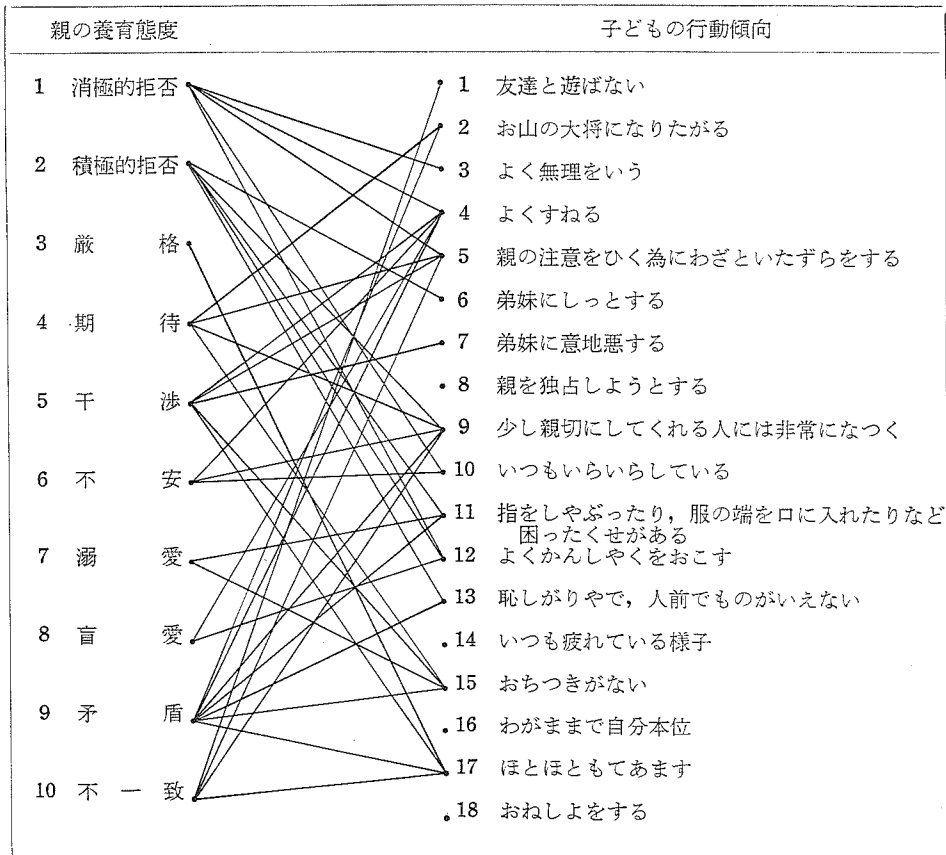
b まず、幼児の行動評価の尺度18項目につき、対象幼児全体の平均ならびに信頼限界(95%)を決定する。つぎに、親の養育態度10項の各項目につき、高点(9点以上)となる幼児を対象幼児中より抽出し、それぞれ、行動評価の各項目別に平均値を求める。第三に、第二段階の操作によって得られた平均点が、第一段階の信頼幅からどの程度ずれたかを吟味する。このような手続によって、親の特定の養育態度と子供の行動の特徴的な傾向との関係が把握される。

4 結果

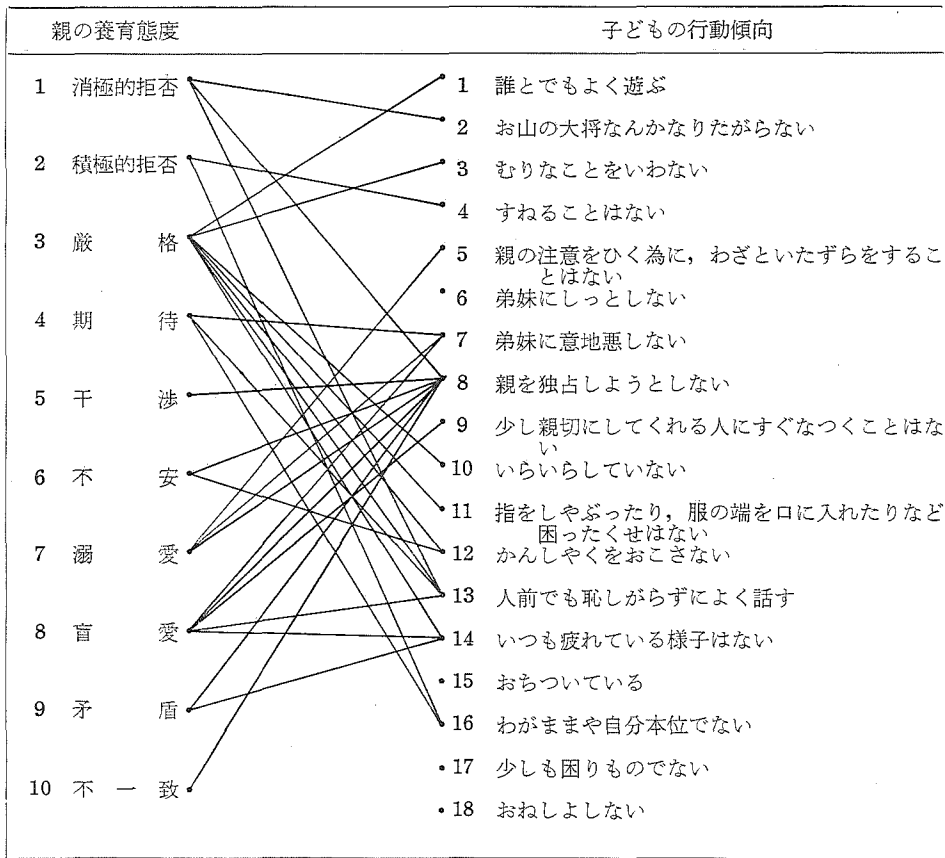
a 幼児の行動に対する教師の評価とその子の親の養育態度との間の相関関係はあまり認められない(相関係数, +0.21)。

b 子どもの行動に関する親の評価と、その親の養育態度との間には、ある程度関係を認めることができる(相関係数, +0.32)。

第2表 親の養育態度と子どもの行動傾向



第3表 親の養育態度と子どもの行動傾向



c 親が特定の養育態度を強く示した場合、子どもの行動傾向との間には、第2、3表のような関係が認められる。第2表は、好ましくない行動傾向との関係を示すものであるが、第3表の方は、幼児の行動でとくに問題とはならないような傾向との関係をあらわしたものである。いずれも実線は養育態度と幼児の行動傾向との密接な関係を示すものである。

5 考察

同一の幼児の行動について、教師の評価と親の評価とはかなりずれているということは、前述の吟味でわかったが、親の養育態度と比較的關係のある幼児の行動評価は、親のものであることが今回の吟味で明らかになった。

Radke⁽²⁾の研究は、親の判定による親の態度と教師の評価した子どもの性格との関係を吟味したものであるが、両者の間にあまりはっきりした関係を見出していない。石黒ら⁽¹³⁾の研究も幼稚園児の性格を教師に評価してもらい、その子の母のしつけは面接調査しているが、両者の間に深い関係を見出しえないとしている。いずれも、親の養育態度と比較するための子どもの行動評価を、教師によって行ったところに問題があったように思われる。

第2表は、親の養育態度と子どもの行動特性との関係を示したものであるが、子どもの望ましくない行動傾向と関係の深い親の態度は、拒否的傾向、矛盾的傾向、それに干渉、期待

である。愛情の過剰や厳格、とくに厳格な態度が、好ましくない子どもの行動傾向と意外に関係の少ない事実が注目される。

また、しばしば、困った子どもの行動としてあげられやすい「親の独占しようとする」「わがままで自分本位である」という傾向は、今回の調査では特定の養育態度と結びついていないことがわかった。幼児期にみられるこのような傾向は親の特定の養育態度の所産というよりも、幼児特有の行動傾向とみた方が妥当であるかもしれない。

今回の調査は、幼児の望ましくない行動の傾向と親の特徴的と思われる養育態度との関係に焦点をしばって行われた。しかし、第3表に示したように、好ましくないと思われるような養育態度が、比較的問題とならない、むしろ望ましいと思われるような行動傾向との間に関係が認められた事実は注目してよい。これはある特定の養育態度から生ずるとみなされる弊害をある程度相殺する役割を果しているかもしれない。とくにわれわれが幼児に接する場合には、ある一つの特定の養育態度に終始することは少なく、むしろ、いろいろな態度をとる場合が多いので、このような相殺の効果もかなり作用しているのではないかと考えられる。

もちろん、われわれはここに使用した親の養育態度の測定法に問題があるのではないかとこの反省も行っているが、しかし、上述のような結果を考慮すると、普通児を対象として、特定の養育態度の効果をとらえることはかなりむつかしくなってくるように思われる。ここに、特殊環境に生育した子ども、問題児、非行少年などの分析が大きな意義をもってくるわけであるが、われわれはつぎにG-P分析を試みてみる。

Ⅳ G-P分析による幼児の行動傾向と親の養育態度の比較

1 目的

上にのべた分析は、幼児126名全体について行ったものであるが、さらに、この対象から比較的良好な傾向を示すとみなされるものと、比較的好ましくない傾向をあらわすものを抽出し、両群の行動特性と親の養育態度とを比較吟味する。

2 調査対象

前述の対象126名に対する親の評価得点により順位をつくり、好ましい方（低点）から25名を上位群、好ましくない方（高点）から25名を下位群とし、計50名を対象とする。対象の性、年齢は第4表参照。

3 調査手続

a 前述の親の判定した行動評価の資料から、両群50名の結果を抽出し、両群別に、行動特性18項目それぞれの平均を求め、比較する。

b 両群の幼児に、個別的に、絵画一欲求不満テスト（児童用）を実施する。テストは樋口で、被験者となった幼児の発言を記録する形式をとり、評価は筆者ら2名の合意を尊重する。

c 前述の親の養育態度の調査資料から、両群50名の親の結果を抽出し、両群別に、各態度類型の平均を求

第4表 上位群、下位群の性、年齢

性	年齢	群		計
		上位群	下位群	
男	6	7	6	13
	5	5	8	13
	計	12	14	26
女	6	8	4	12
	5	5	7	12
	計	13	11	24
総計		25	25	50

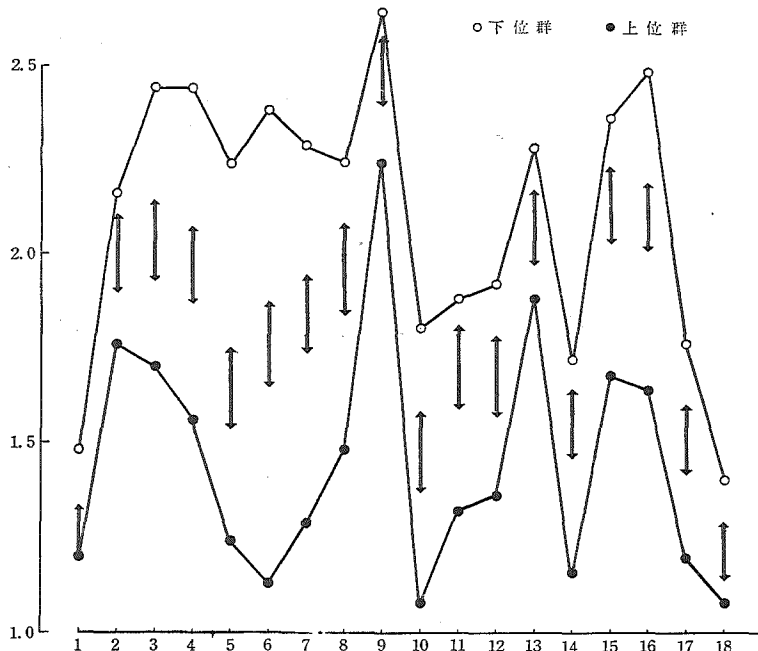
め比較する。

4 結果

両群の行動の特性は、第1図に示すとおりである。上位群は、対象126名の平均的な傾向よりも望ましい方向（図では下の方）に傾き、下位群の結果は、反対に好ましくない方向（図では上の方）に傾いている。

絵画—欲求不満テストの結果は、第5、6表のとおりであるが、両群間に有意な差を見出すことはできない。

両群の親の養育態度の比較は、第7表に示すとおりである。両群を区別する態度類型は拒否型、干渉型、不安型、矛盾型、不一致型で、下位群の親の養育態度の方が、いずれも、望ましくない方向を示している。



第1図 両群幼児の行動傾向 縦軸、得点。横軸、調査項目。矢印のついた縦太線は、全対象による平均の信頼限界（95%）。以下行動評価の各図同様。

第5表 評点カテゴリー別平均及び偏差値

		E	I	M	O—D	E—D	N—P	GCR
上位群	M	50.5	15.8	33.9	18.6	45.9	35.7	42.0
	S.D.	13.8	8.15	10.68	7.65	11.48	12.81	15.97
下位群	M	51.3	15.4	33.6	18.3	45.2	36.4	42.0
	S.D.	17.74	8.85	19.82	7.25	14.07	13.60	16.55

第6表 超自我因子別平均及び偏差値

		<u>E</u>	<u>I</u>	<u>E+I</u>	<u>E-E</u>	<u>I-I</u>	<u>M+I</u>
上位群	M	6.4	0.9	7.3	18.7	6.8	34.7
	S.D.	4.25	1.85	5.80	7.30	3.50	10.49
下位群	M	5.1	1.5	6.5	15.3	8.7	34.9
	S.D.	5.25	2.99	5.22	10.19	5.73	19.03

5 考察

上位群と下位群の行動上の特性の違いは、各項目とも明確に示された。もちろん、本尺度が、子どもの問題行動のすべてにわたるものではないが、子どもの行動の傾向が好ましい方向にあるかどうかを見分ける道具として十分使用することができよう。今回の分析によると、幼児の行動傾向に大きな差がみられるのは、それらの親の養育態度の違いによるものであることがうかがわれる。しかし厳格、期待、盲愛、溺愛の養育態度に関しては、両群の間に差を見出すことはできなかつた。今回の吟味のような極端な傾向の幼児群を比較した場合にも、両群間に差を認めないという事実は注目にあたいる。

絵画—欲求不満テストの結果からは、両群間に有意差を見出すことができなかった。このことは、テストの未熟さによるかもしれないが、判定は筆者ら2名の会意の結果である。したがって判定の不適当さによるというより、むしろ、この種のテストの結果にあらわれるような特徴のある幼児が、対象中に含まれていなかったと考えた方がよいかもかもしれない。

V 家庭環境ならびに育児条件と子どもの性格

1 目的

親の養育態度の測定の場合には態度類型の内容とにかく疑問がおきやすい。そこで比較的明確な条件として、家庭環境と育児条件をあげ、これらと子どもの性格との関係を吟味しようと思う。

2 調査対象

前述の上位群25名、下位群25名、計50名。

第7表 両群の親の養育態度

養育態度	群		下位群	
	上位群		M	S.D.
1 消極的拒否	M	S.D.	M	S.D.
1 消極的拒否	5.68	1.29<	6.68	1.22
2 積極的拒否	6	1.52<	7.36	1.26
3 厳格	6.52	1.46	7.04	1.55
4 期待	6	2.16	6.68	2.05
5 干渉	7.12	1.7<	8.56	1.49
6 不安	7.84	2.14<	9.04	2.08
7 溺愛	6.52	2.20	6.8	1.94
8 盲愛	6.16	1.61	6.84	1.75
9 矛盾	6.13	1.92<	8.28	2.06
10 不一致	5	1.20<	6.24	1.74

△印は1%の有意差
 <印は5%の " } を示す

3 調査手続

前述の親の養育態度の調査用紙に必要な事項を記載しておき、養育態度の記入と同時に記入してもらう。

4 結果

家庭環境ならびに育児条件につき、両群の比較を試み、つぎのような結果を得た。

a 家庭環境の比較

(1) 父母関係 全員実父母にして両群に差を認めない。

(2) 兄弟関係 出生順位は第8表に示す。第1子は比較的下位群に多く、第4、5子は上位群に多くみられる ($\chi^2=5.09, 0.05>P>0.02$)。

長子、末子を両群につき比較した結果は第9表で、長子は下位群に多く、末子は上位群に多い ($\chi^2=8.30, 0.01>P$)。

兄弟数の比較では、両群間に有意な差を認めない。

(3) 同居人の有無 同居祖父母の有無、祖父母以外の同居人の有無については、ともに両群間に差を認めない。

(4) 家の大きさ (部屋数を1人あたりに換算して示す) 両群に差を認めない。

(5) 家の宗教関係 家の宗教の有無については (第10表)、あるとはっきり回答のあったのが上位群の子どもの方に多く、反対になしとするものは下位群に多く認められた ($\chi^2=4.27, 0.05>P>0.02$)。母の信仰の有無 (第11表)、宗教的行事の実施 (第12表)、幼児の行動評価に神仏をひきあいに出すかどうか (第13表) などの各項目については、両群間に差を認めない。

b 育児条件

(1) 授乳事情 とくに差を認めない (第14表)

(2) 授乳時の愛撫 差を認めない (第15表)。

(3) 離乳開始時期 生後6カ月以内に始められたものは上位群に多く、開始時期の遅れるものは下位群に目立っている (第16表、 $\chi^2=10.24, 0.02>P>0.01$)。

(4) 離乳終了時期 無回答を除くとほとんど有意差に近い (第17表、 $\chi^2=$

第8表 出生順位

順位	群	
	上位群	下位群
1	6<	12
2	9	10
3	6	3
4	2	0
5	2	0
計	25	25

<印は危険率5%の有意差を示す

第9表 両群内の長子と末子

	上位群	下位群	計
長子	5	12	17
末子	17	11	28
計	22	23	45

第10表 家の宗教

家の宗教	群	
	上位群	下位群
あ る	16	10
な し	9	15
計	25	25

第11表 母の信仰

母の信仰	群	
	上位群	下位群
あ る	4	6
な し	21	19
計	25	25

第12表 宗教的行事の実施

実施	群	
	上位群	下位群
す る	15	13
し ない	10	12
計	25	25

第13表 行動の評価に神仏をひきあいに出すか

	群	
	上位群	下位群
出 す	14	18
出さない	11	7
計	25	25

第14表 授乳事情

時間をきめて与えたか	上位群	下位群
はい	14	12
時々	3	4
いいえ	8	8
回答なし	0	1
計	25	25

第15表 授乳時の愛撫

泣いた時すぐ抱いたか	上位群	下位群
はい	6	9
時々	13	10
いいえ	5	4
回答なし	1	2
計	25	25

第16表 離乳開始時期（生後月）

離乳時期	群	上位群	下位群
3 ~ 6		8 >	0
7 ~ 9		6	6
10 ~ 12		8	10
12 以上		3 <	8
回答なし		0	1
計		25	25

第17表 離乳終了時期（生後月）

離乳終了	群	上位群	下位群
8 ~ 11		6 >	1
12 ~ 23		15	17
24 以上		2 <	6
回答なし		2	1
計		25	25

>, <印は危険率5%の有意差を示す

>, <印は危険率1%の有意差を示す

5.716, $\chi^2_{0.05}=5.991$ 。

5 考察

離乳の開始, 終了の時期が, 上位群, 下位群を区別する要因となったことは興味深いことであつた。すなわち, 離乳を早く始めた子どもが上位群に多く見出され, 下位群には遅い子どもが多かつた。また, 離乳終了の早い子は上位群に比較的多く, 離乳の遅れた子は概して下位群に多くみられた。このことから離乳は早く始め, 早く終る方が子どもに与える影響は(6)良いといふことができる。この点は精神分析学派の考え方とは異なつた事実である。牛島は授乳法, 離乳開始時期, 終了時期と子どもの安定性格とは無関係であるといつており, 玉井は, 組織的, 計画的な授乳, 離乳の子どもは, 社会的成熟が早いと報告している。星野(12)も, 社会的成熟を手がかりに育児条件を吟味しているが, 離乳の開始, 終了の時期が遅れた子どもは下位群に多いという事実をあげている。とに角, 離乳の開始, 終了の時期と子どもの性格との関係は, 精神分析学派の主張どおりにはいかないようである。精神分析学の生れた西欧の社会とわが国の社会とでは, 社会組織も家庭生活の様相も異なつてゐるのであるから, われわれは, われわれの家庭生活における具体的な事実から出発する必要がある。石黒(14)も, 親の態度と子どもの性格を研究するには, わが国の家庭生活の実情を考慮すべきであることを指摘している。

もちろん, 幼児の性格の形成を, 離乳の開始, 終了の時期という要因に直接結びつけて考えることは大事であるが, それだけではなく, 離乳を早く始め, 早く終了するような母親は

ひろく生活の他の面においても特徴的な養育態度を示しているのではないかと検討しておくことも大切である。

兄弟関係では、上位群に末子が多く、長子はむしろ下位群の方に多く認められた。これは長子の養育で得た経験や知識があとの子の養育によい影響を及ぼしたものと思われるが、この点でも、やはり長子や末子に対する親の養育態度の相違を吟味してみる必要がある。

Ⅵ 離乳の開始、終了の時期と親の養育態度 ならびに長子、末子と親の養育態度

1 目的

これまでの吟味によって、子どもの性格と関係の深い条件として、離乳の開始、終了の時期と出生順位の問題が明らかになった。ここでは、これらの条件と親の養育態度の関係に検討を加えようと思う。

2 調査対象

前述の調査対象 126 名中より、離乳開始時期生後 3～6 月のもの (25 名)、1 年以上のもの (25 名) ならびに離乳終了が 2 年以上に及んだもの (13 名)、それに長子 (44 名)、末子 (54 名) を抽出する。

3 調査手続

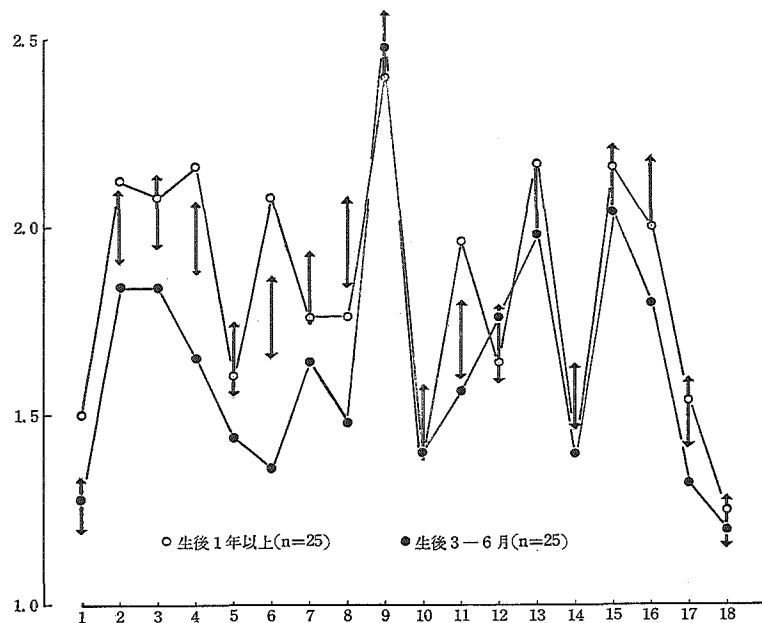
各対象とも、前述の行動評価ならびに親の養育態度の調査資料を使用する。

a 離乳開

始生後 3～6 月の幼児 25 名の行動の傾向につき各調査項目別に平均を求める。同様の手続で生後 1 年以上ならびに離乳終了 2 年以上の幼児の行動傾向の平均を求める。

b つぎに以上の対象の親の養育態度につき各調査項目別に平均を求める。

c 長子、末子の場合も同



第2図 離乳開始の時期と子どもの行動傾向

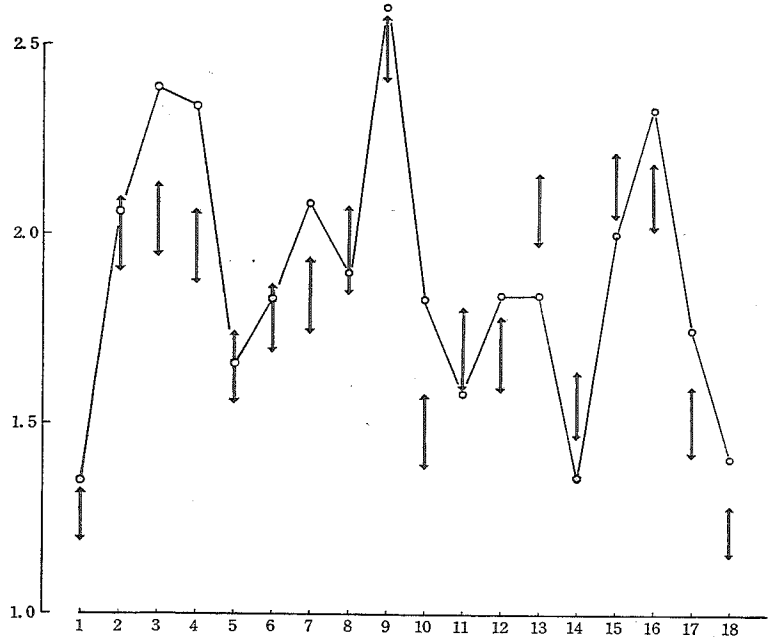
様の手続で、長子と末子の行動傾向を、それぞれ別個に、かつ調査項目別に平均を求める。また長子、末子の親の養育態度の傾向もbの場合と同様に求める。

4 結果

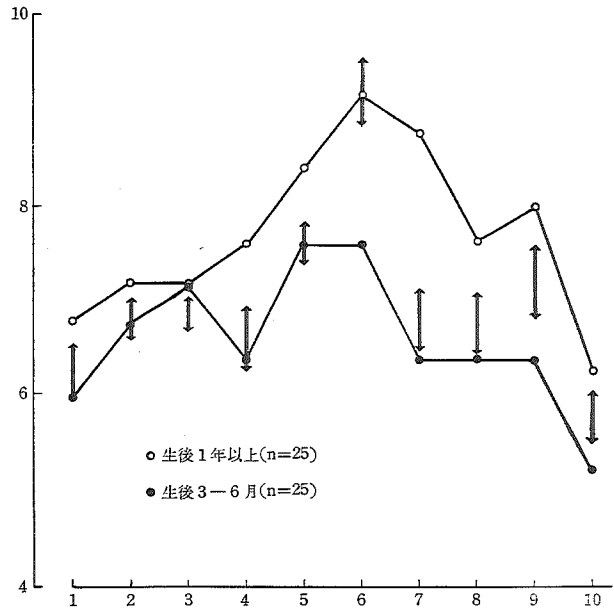
a 離乳開始の時期が生後3～6月であった子どもの行動傾向と、生後1年以上たってから

始められた子どもの行動傾向は第2図に示すとおりである。とくに、調査項目4, 6, 11などに、両群の違いをみる事ができる。離乳終了が生後2年以上に遅れた子どもは、情緒的に不安定な傾向を示している(第3図)。

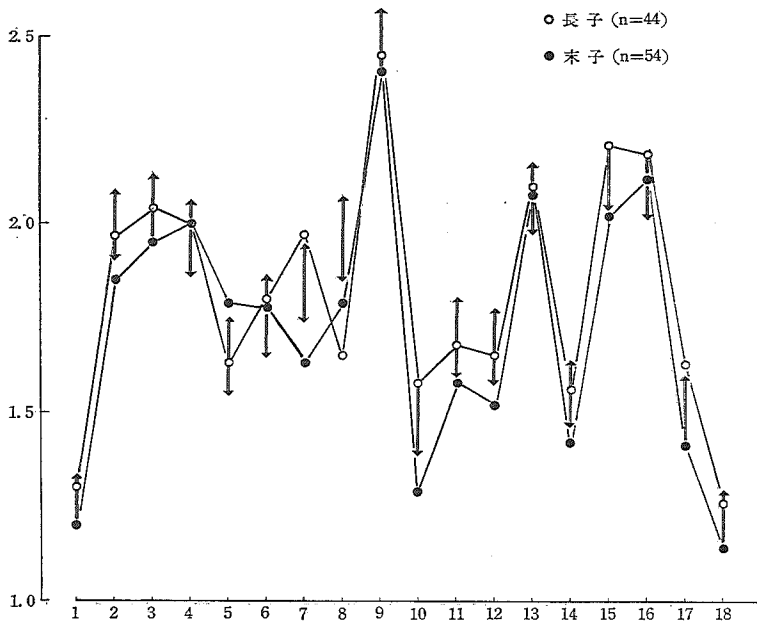
b 離乳開始の時期を異にした幼児群の親の養育態度を示したものが第4図である。離乳開始が遅れた子どもは、親の養育態度の側面からみても好ましくない傾向がみられる。とくに、期待, 干涉, 溺愛, 矛盾などが目立つ。長子と末子の行動の傾向は第5図, 長子, 末子に対する親の養育態度は、第6図に示すとおりである。とくに、長子に対する態度の型には、拒否, 期待, 干涉が目立っている。



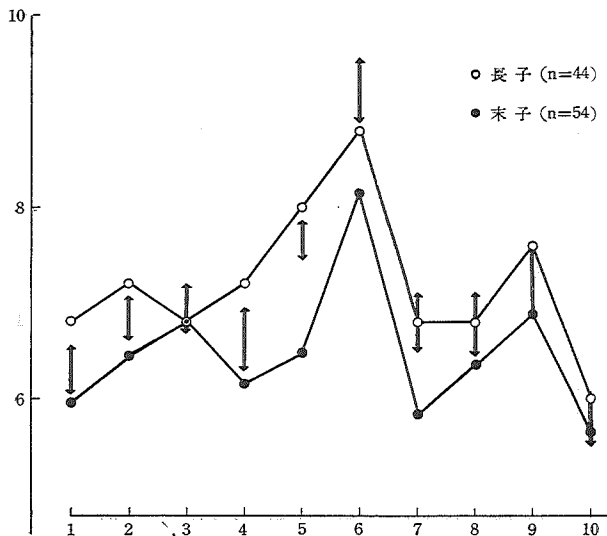
第3図 離乳終了が生後2年以上に及んだ子どもの行動傾向 (n=13)



第4図 離乳開始の時期と親の養育態度 縦軸, 得点。横軸, 養育態度の型。矢印のついた太線は、全対象による平均の信頼限界(95%)。以下各図同様。



第5図 長子と末子の行動傾向



第6図 長子と末子に対する親の養育態度

5 考察

離乳開始の時期や終了の時期が幼児の性格に密接な関係のあることは、すでにふれたところであるが、なお離乳開始が早かった母親、遅れた母親は、現在の家庭生活の中にあってもそれぞれ特色のある養育態度を示していることが、今回の吟味によって明らかになった。われわれは離乳開始の早

い遅いということ自体が直接幼児の性格形成に与える影響のことももちろん認めるものであるが、子どもが、乳児期から幼児期にかけて常時母親からうける養育態度の影響の大であることをはっきり指摘したい。

長子と末子に対する親の養育態度の違いも明らかに示されたが、これは興味深い事実である。長子、末子の性格を考える場合の一つのよりどころになるだろう。

Ⅶ 総括

本研究においては、四施設の幼児126名を対象とし、教師と親による幼児の行動評価

親による家庭環境および養育態度の自己評価にもとづき、親の養育態度と子どもの行動傾向との関係が吟味された。本研究によって明らかにされた点はずのごとくである。

1 幼児の行動評価については、教師と親の見解は一致しなかった。これは、主として環境の相違による幼児の行動のあらわれ方の違いによるものと考えられた。

2 親の養育態度の自己評価と幼児の行動に関する親の評価とは、ある程度の相関関係が認められた。しかし、前者と教師の評価とは、ほとんど関係が認められなかった。このことは、親子関係を研究する場合に、子どもの行動を誰が評価するかということに関して重要な示唆を与えるものである。

3 幼児の好ましくない行動の傾向と親の特徴的な養育態度との間には、ある程度関係が認められた。しかし、同時に、親の特徴的な養育態度は、必ずしも好ましくない行動と関係があるばかりでなく、むしろある種の望ましい行動にも関係のあることがわかった。

4 全対象 126 名より、好ましい行動傾向の幼児 25 名（上位群）と好ましくない行動傾向の幼児 25 名（下位群）を抽出して比較した結果、両群の行動傾向の間には全般的に著しい相違が見出された。

5 両群の親の養育態度を比較した結果、厳格、期待、溺愛、盲愛のほか有意な差を認めた。両群の親の養育態度の違いならびに両群の子どもの行動傾向の違いを考え合せ、両者の密接な関係をうかがうことができた。

6 絵画—欲求不満テストの結果は、どのカテゴリーや因子をとっても両群の間に有意な差を認めなかった。

7 環境条件の中では、宗教をもつ家庭の子どもが、上位群に多く認められた。

8 兄弟関係では、上位群に末子が多く、長子は下位群に多くみられた。同時に、長子、末子に対する親の養育態度にも差がみられた。

9 離乳については、開始時期の早いものが上位群に多く、開始の遅いもの、完了の遅れたものは下位群に多くみられた。同時に、親の養育態度にも差が認められた。

10 長子、末子に対する親の養育態度や離乳の開始時期、完了時期に関する育児態度の吟味から、幼児の性格形成にはひろく親の養育態度が重要な意義をもつことが討議された。

本研究は、樋口が、本学に国内研修生として在学中に実施したもので、その結果の一部は樋口により、私学研修 第11集（1961）に報告された。その後、資料の扱い方に基礎的な誤りを見出したので、一部の計算をなおした。その結果の概要は、樋口により、第5回 東海地区私立幼稚園教員研修会（1963）において報告された。本稿は、共同討議の結果を、中川がリライトしたものである。筆をおくにあたり、本研究の実施にあたって協力と援助をおしまれなかった松本市百合幼稚園々長小林篤実氏ならびに同園、鈴蘭幼稚園、諏訪市聖母幼稚園の職員の方々に、また原稿の整理に協力された高山朝子氏に、感謝の意を表すものである。

文 献

- 1 Symonds, P. M. : The psychology of parent-child relationships. 1939.
- 2 Radke, M. J. : The relation of parental authority to children's behavior and attitudes. 1946.
- 3 Baldwin, A.L. : Socialization and the parent-child relationship. *Child Developm.*, 19, 1948, 122~136.
- 4 Roff, M. : A factorial study of the Fels Parent Behavior Scales. *Child Developm.*, 20, 1949, 29~45.
- 5 平沢良助：家庭の養育態度と児童のパーソナリティ 日本応用心理学論文集, 第1集, 1951, 32.
- 6 牛島義友：育児態度と子供の性質 九州大学教育学部紀要, I, 1952.
- 7 Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V. and Sears, P. S. : Some child-rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. Psychol. Monogr.*, 47, 1953, 135~234.
- 8 Glueck, S. and E. : Unraveling juvenile delinquency. 1950.
- 9 牛島義友, 横尾和子：施設と家庭における保育態度の研究 児童心理, 7の9, 1953, 46~53.
- 10 中西昇, 小西勝一郎, 谷嘉代子：親子関係の心理学的研究 大阪市立大学家政学部紀要, 1の4, 1953, 1~41.
- 11 中西昇, 丹下庄一, 長尾憲彰, 谷嘉代子：親子関係の心理学的研究 第3報告 大阪市立大学家政学部紀要, 2の5, 1954, 13~22.
- 12 玉井収介：幼児の社会的成熟に関する研究 第II報 育て方と社会的成熟の関係—I 児童心理と精神衛生, 4の4, 1954, 20~26.
- 13 石黒大義, 旭好子：乳幼児の育て方と人格形成 児童心理と精神衛生, 4の5, 1954, 6~14.
- 14 石黒大義：親の態度と子供の性格 児童心理, 8の12, 1954, 60~67.
- 15 中西昇, 小西勝一郎, 並川信子：親子関係の心理学的研究 第7報告 大阪市立大学家政学部紀要 4の5, 1956, 7~19.
- 16 赤塚泰三：家庭のしつけの型と子供の情緒反応との関係 日本応用心理学論文集, 第9集, 1956, 18.
- 17 赤塚泰三：しつけの型と子供の社会的適応性との関係 日本応用心理学論文集, 第10集, 1957, 40.
- 18 Shaeffer, E. S. and Bell, R. Q. : Patterns of attitudes toward child rearing and the family. *J. abn. soc. Psychol.*, 54, 1957, 391~395.
- 19 中西昇, 小西勝一郎, 並川信子：幼児の指絵の人格的研究—親の態度との関係及び幼児の行動特性との関係 大阪市立大学家政学部紀要, 5, 1957, 63~74.
- 20 津守真, 稲尾教子：乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響 教育心理学研究, 5の4, 1958, 14~24.
- 21 島袋弘子, 中川輝子：家庭での子供の扱い方とクラス内での人気 児童理解の方法 誠信書房, 1958, 111~117.
- 22 品川不二郎, 品川孝子：田研式親子関係診断テスト 日本文化科学社, 1958.
- 23 中西昇：親子関係の心理学的研究 第8報告 教育心理学研究, 6の3, 1959, 17~22.
- 24 山下俊郎, 三浦武, 森重敏, 三輪正：家族関係に関する基礎的研究 その1—父母のしつけ態度と子どもの性行等との関係— 日本心理学会第22回大会発表論文集, 1958, 224~225.
- 25 矢吹四郎：母の養育態度の因子分析的研究 日本心理学会第23回大会 1959.
- 26 竹内長士, 矢吹四郎：親の子に対する態度についてのQ—方法論的研究 日本心理学会第24回大会

発表論文集, 1960, 320.

- 27 矢吹四郎, 竹内長士: 親の子に対する態度の類型についてのQ—方法論的研究(続報) 教育心理学会第2回大会, 1960.
- 28 小島秀夫: 親子関係と幼児の社会化 教育心理学研究, 7, 1959, 200~209.
- 29 星野命, 須江ひろ子: 社会的成熟度と育児様式の関係—長野県西筑摩郡開田村調査結果—日本応用心理学論文集 第12集, 1959, 1.
- 30 森重敏, 山下俊郎, 和田陽平, 辻正三, 三浦武, 中村陽吉, 滝沢清子, 今井省吾, 島津一夫, 外村大作, 三輪正: 生育環境としての家族関係の分析—(2) 父—母—子の接触の研究 日本心理学会第23回大会, 1959.
- 31 中西昇, 小西勝一郎, 丹下庄一: 親子関係の心理学的研究(II)—非行少年の親子関係について 日本心理学会第24回発表論文集, 1960, 329.
- 32 津守真, 仁科弥生, 横山峰子, 長塚和弥: 親子関係と幼児のパーソナリティの発達(その1) 幼児のパーソナリティと親子関係 日本心理学会第20回大会発表論文集, 1960, 331~332.
- 33 依田明: 母子関係と幼児の性格 日本心理学会第24回大会発表論文集, 1960, 337.
- 34 Mason, D. R. and Anders, S.: Traits of fatherhood as revealed by the factoranalysis of a parent attitude scale. J. genet. Psychol., 96, 1960, 115~122.
- 35 山下俊郎, 三浦武, 八重島健二, 三輪正, 島田俊秀: 父—母—子関係の分析(5) 日本心理学会第25回大会発表論文集, 1961, 220.
- 36 山下俊郎, 三浦武, 森重敏, 八重島健二, 三輪正, 島田俊秀: 父—母—子関係の分析(6)—要因の分析的研究— 日本心理学会第25回大会発表論文集, 1961, 221.
- 37 児玉省, 山本弘子, 信江裕子: 家庭のしつけの研究 日本応用心理学論文集第14集, 1961, 14.
- 38 山田章倫: 親子関係の研究—親のしつけ態度に対する親と子の見方の相違と子どものパーソナリティについて—日本心理学会第25回大会発表論文集, 1961, 222.
- 39 Serot, Naomi, M. and Teevan, Richerd, C.: Perception of the parent-child relationship and its relation to child adjustment. Child Pevelpm., 32, 1961, 373~378.
- 40 児玉省, 宮本美沙子, 平野ひかる: しつけの類型の研究 I 日本応用心理学論文集, 第15集, 1962, 24.
- 41 児玉省, 信江裕子, 長島良子: しつけの類型の研究 II 日本応用心理学論文集, 第15集, 25.
- 42 児玉省, 宮里澄子: しつけの類型の研究 III 日本応用心理学論文集, 第15集, 25.

Summary

Psychological Study of the Parent-Child Relationships

Dairin NAKAGAWA* and Naoko HIGUCHI**

The relationships of the children's personality and the pattern of parental attitudes toward children were investigated by several methods. Subjects were 126 kinder-garten children and their mothers.

The results are the following:

(1) There was a difference between the evaluation of children's behavior by their mothers and by the teachers of the kinder-gartens.

(2) A significant relation was found between mother's self-evaluation of their attitude toward children and their evaluation of children's behavior, but no particular relations were found between the mothers' self-evaluation and teachers' evaluation of children's behavior. This fact offers a suggestion as to who should observe the behavior of the children in the study of the parent-child relationships.

(3) It was found that the undesirable behaviors of the children were related to the distinguishing traits of their mothers' rearing attitude.

(4) According to the good-poor analysis of the children, the tendency of the behaviors of the good-group members extremely differed from that of the poor-group members. The rearing attitude of the mothers of both groups also indicated significant differences in 6 out of 10 patterns of their attitudes.

(5) More children of early weaning and more youngest children were found in the good-group than in the poor-group, and children late in weaning and the first-born were found more in the poor-group than in the good-group.

(6) With exclusive reference to these facts, the relation between mothers' rearing attitude and their children's personality was discussed.

* Professor of Shinshu University

** Teacher of Shirayuri Kinder-Garten in Matsumoto